

## 国際感覚とは？

2016年2月14日

「新井君アメリカでなくヨーロッパでいいかな？」そう言われて「ええ、仕事ですから何処でもいいですよ。」と直ぐに反応してロンドン駐在が決まった。英語がからしき駄目なのを横目にアメリカ駐在を希望して数年後、忘れそうなときに話がまとまった。遅咲きの39歳、顕微鏡開発を続けてきたノウハウを卒業研究のように4冊のファイルにまとめ、机の引出を片付けたのが出発土曜日の昼、夜の成田空港に家族のほかにも組合時代の仲間が二人車を飛ばして駆けつけてくれたのが何とも嬉しかった。

駐在は車の運転と家探しから、家とオフィスと空港の三角形の道りを先ず覚えることから始まる。イギリスの道路は日本と同じ車は左なので違和感はないが高速道路はマイル表示があり出口まで「1m」の表示を見たときは「あと1.6kmだな。」と換算が必要。

イギリス人は意外とシャイで近所の人とおぼしき人と目を合わせても知らん振りをするがこちらから「Hallow。」と答えると途端に笑顔になり丁寧な挨拶が返って来る。近所に日本人が越してしたことに興味津々重々承知の上でこちらが反応しない限り距離を置き静観している。しかし一度親しくなるととことん面倒見がいい。本音と立て前の使い分けも日本人に近い。

技術営業部にデスクを構え英語の生活が始まった。彼らのやり取りを通して、あいまいな表現はなくYes/Noをはっきり問われることが判ってきた。そして日本ではYesを期待した問いかけが多くて80%Yesで支障はなかったが、英国ではNoと答えたほうが問題ない様だ。

同僚のDr. Freemanと学会に出かけた時の食後の飲会で、友人とのやり取りを隣で聞いて感じた。ご他聞に漏れず仕事の話になったが日本人の会話では「ああそうなの。」と軽く受け入れたあと「だけど、ここは違うな。」と返すYes/Butとなるが、彼らの場合は全面否定である。相手の話に対して全否定したのち、「なぜならば、ここはこうで・・・。」とまくしたてる。それに対して相手も同じ様に反対意見をぶつける。喧々諤々これを延々つづける。日本人の感覚ではちょっと激しすぎて付いていけない。何時まで続くのかと言うとお開きの午前1時まで、そして又明日と厳しい顔を笑顔にかえて別れる。日本人は根底に「話せば分かり合える。」と考えるが、海外では「話しても分かり合えない。」が基本のようだ。日本人同士では話合いでの解決は、お互いに共通認識ができた上での意見の違いを明確にするが、海外では、お互いまったく意見が異なるが、こことこのこういう所だけは意見の一致ができた。」と言うことになる。国際社会ではYes/Butは通用せずNo/Butでないといけない。否定されると覚悟した問いかけに日本人がYesと言った途端に相手は面食らってしまったのだ。

2016年2月14日 新井善博